学生会議

通信

No.12 '68.6.13

東京教育大学 学生会議

筑波移転推進のための学内再編

―学長選阻止!!

本日第一次学内選挙が行なわれようとしている。我々はまず第一に、本日、明日と続く学長選に対して断固たる阻止の斗いをくむことが、昨日の文学部学生大会において圧倒的多数によって確認されたことを報告しておきたい。今回の学長選が移転反対か賛成かを問うものとして存在するのではなく、その遂行自身が学内の一定の「対立と混乱」を拾収し、学内体制を再編整備していくものとして、筑波移転推進の一環としてあること、従って我々のこれに対する対応は、ユウレイ的「民主的候補」を学長にするための尻押しをすることではなく、学長選遂行という里学的行事を阻止していくことでなければならない。ということが大衆的に確認されたのである。

本日から始まる学長選阻止のたたかいに全ての学友諸君が決起されんことを訴えるとともに、昨日の文学部学生大会ならびにその過程において表現した文教授会との意見等の中で明らかになった様々な問題点に対する我々の見解を述べて見たい。まず昨日の学生大会ではっきりしたことは、委員長、副委員長を中心とする執行部少数派の民青系諸君が（理論的破綻は言うに及ばず）もはや広く大衆的基盤を、なかんずく斗う学友の支持を喪失しているという事実である。選挙遂行自体は秩序主義者よろしくすでに既定のものとして容認し、その上に「民主的学長実現」となす学長選挙利しなどの方針をたてるの観念性、空語性は、彼らが曲りなりにも「民主的」と判断する林前理学部長なる押込みにおいては、移転推進に一定の役割をはたしてきたという事実を前にして、完全なまでに示されている。教授層が「反動派」と「民主勢力」に単純に色分けできるかどうかは別としても、それを判別する基準はどこにあるのか、一体どの教授と連帯するのかも明らかにすることなく、「民主的教授」との統一戦線を自己目的化して戦略的に追求する指導の無力性と犯罪性は、もはやほとんどの学友の認識となっている。

さらに、この学長選斗争を抽象的理念的な大学自治の問題へと収約し、学長選を含む筑波斗争を改良斗争へとおとし込めていく諸君が存在していることも見のがしてはならない。「学生不在の学長選」だから、学長選を阻止するのではない。学生が学長選に制度的に介入していようといまいと、今回の学長選の遂行自体が筑波へ向けての一里程なのだ。このことは文学部教授会に対する我々の対応ともかかわってくる。文教授会の学長選に対する態度を「妥協とヤミ取引き」と評価し「教授会の無能力」を批判し、彼らの立場を「変革」していくという方針がそれである。しかし文教授会の対応は「妥協とヤミ取引き」ということからきたものではなく、正に「教授会」という枠内の密室的性格、そのワク内での動く教授層の限界性に起因しているのだ。従ってわれわれは当面の対決対象を「変革する」という一定の幻想をもちつつ文教授会に設定することは出来ない。いやむしろ昨日の文教授会との大衆「団交」の過程と結果は、我々の斗いを抜きにした彼らとの接触が密室的には、教授会の我々学生に対する抑圧、懐柔としての意味しか持たないことを明白に示している。（二者協議会は全くナンセンスであり、これを要求する傾向こそ、前述の制度改革論者の本性のバクロである）。我々の基本的方向性は、この筑波学長選斗争を大学の帝国主義的再編に対する抵抗と反撃の斗いとして位置づけるとともに、対学長評議会団交を追求しつつ、六・一の決起、H、評議会即時解散を要求し、攻撃的な斗いを展開していくことでなければならない。

学友諸君!! 候補者が主観的にどうあれ、彼らが二期間の筑波移転に主眼をおいた問題・懐柔の問題に征服し、推せん文自体、筑波移転の形成事実、6・10決定、M・P委員会について示されている以上、結果的には「話し合い」と反面盤を固め権力の政策を容認する方向性を持つことは明らかである。本日の学長選斗争を学生大会で決議し、新学問の名のもとに抗議し、強行されるのである。本日明日の学長選斗争、調査費計上をストライキで阻止しよう!!